

テン・リトル・インディアンズ

ドイツの童謡 [Zehn kleine Negerlein] を巡って

若山俊介

0. はじめに

ドイツに [Zehn kleine Negerlein] という童謡がある。これはドイツ人ならだれでも知っている歌、つまりすでに3才、4才の幼い頃から何度も歌ったか、少なくとも聞いたことのある歌である。今回はこの歌を巡って論を進めていくが、本論のタイトルは「テン・リトル・インディアンズ」とした。この点についてまず述べておきたい。

本論のタイトルには、本来は [Zehn kleine Negerlein] の和訳を使いたかった。これをそのまま訳すと「10人のかわいい黒ん坊」となる。そこでためらったのは、この「黒ん坊」という日本語がいわゆる差別語というのか軽蔑語、ないしは蔑視語にあたるということである。(以下は便宜的に蔑視語で通す。)すでに数年前、あるいは十数年前、『ちびくろサンボ』という物語および絵本が、黒人差別という批判を受け問題になり、今ではこの愛らしい物語は、日本の幼児(あるいは全世界の幼児)の接することのないものとなってしまったようである。これに伴ってか、または全く別の経緯でか定かでないが、「黒ん坊」という言葉もまた、慎重に使用しなければならない、というよりも使用してはならないものになった。

この種の蔑視語については、個人的にはある種の「ことばの虐待」のように思えることもある。例えば、「ジプシー」という言葉がある。これも蔑視語の一つらしいが、これはドイツ語では [Zigeuner] という。私はドイツ語教師であるが、この [Zigeuner] を日本語に訳そうとしたら「ジプシー」とするしかないとはまでは言わないが、その訳語が最もふさわしい。ところが、その感覚で「ジプシー」という日本語を口にすると、そういう言葉を使うものではないと激しく嗜める人がいる。これは結局、私がこの種の蔑視語に対して鈍感、無頓着であり、敏感な人には許しがたいものであるということに尽きるのかもし

れない。私個人としてはただ [Zigeuner] の訳語としての「ジプシー」を使っているだけなのである。そこには何の偏見もなく、軽蔑や蔑視の意識はない。しかし、このような言葉に敏感な人にとっては限りなく犯罪に近い所業となる。

これと似たものとして男女差別の問題もある。英語では [chairman] は「男の議長」しか表さないから、平等に [chairperson] にすべきであり、これはすでに事実そのようになっているようであるが、その種の主張はきりもなくあるらしい。中には、「マンホール=manhole」に、なぜ「男」を使わなければならないのかという過激な話というよりも、むしろそれを乗り越えて滑稽ともいえる話を聞いたこともある。そんな時、おもしろい話と笑いながらも、ふとため息の出るような無力感に襲われる。言葉の上で、ただ言葉だけを取り上げて、何もそこまで突き詰めなくともいいのではという気持ちとともに、そういう発想の延長線上で言葉の持つ表現力を狭めているのではないかと思うのである。

ドイツ語はその点では、男女差別、あるいは男女区別の著しい言葉であると思う。周知のように、ドイツ語の名詞には男性、女性、中性の区別があるが、例えば職業、身分を表す名詞は男性が主で、それに接尾辞 [-in] を付けると女性になる。授業でよく使うものをいくつか挙げれば、男の「先生」は [Lehrer] だが、これがもとになり女の「先生」は [Lehrerin]、「大学生」は [Student] で、「女子大学生」は [Studentin]、きりもないが「友達」は [Freund] が [Freundin]、「日本人」は Japaner が男性で、女性形は [Japanerin]、「ピアニスト」は [Pianist]、[Pianistin] といった具合である。あくまでも男性が主で、それに尻尾を付けて初めて女性形ができる。これは男女差別、ないしは男女区別にしても男性優位ではないか。また、それとは逆に [Doktor] であったか [Professor] であったか、昔は [-in] を付けた女性の形がなく、その身分の女性を表わす場合はその語の前に「ミセス」にあたる [Frau] をつけて済ませていたという話を聞いたことがある。これに女性の立場からかみついた人がいて、接尾辞 [-in] を付けて女性にするのはいい、しかし、「博士」ないしは「教授」に [-in] の女性形がないとは男尊女卑もはなはだしいというものである。これについては、現在は [Doktorin] も [Professorin] もどの辞典にも載っている。さらにもう一つだけ挙げると、「人間」には当然男も女もいるわけだから間をとって中性であるべきであるが、文法的には男性で、男性名詞用の定冠詞を付けて [der Mensch] という。他にも例を挙げればいくつでもあるが、今は話を戻そうと思う。

[Zehn kleine Negerlein] について言うなら、[zehn] は「十」、[klein] は「小さい、

かわいい」、[Negerlein] は「黒人」を意味する [Neger] に、[-lein] を付けたものである。[-lein] は [-chen] と並んでよく使われ、両者とも「小さいもの、かわいいもの」を表す接尾辞であるから、[Zehn kleine Negerlein] は以上のような軽蔑やら蔑視という偏見を抜きにして、むしろ愛着すらもって「10人の黒ん坊」としか訳しようのないものと考えるのである。

その上であえて繰り返す。以上、ある言葉を蔑視語扱いするのは、その国の言語を貧しくするのではないかという意味で「ことばの虐待」ということを言ったのであるが、これはその蔑視語に該当する当事者、あるいはその当事者に近い者にとっては耐え難い侮辱であり、許しがたいことであることは言うまでもない。そのような意味で、本論の [Zehn kleine Negerlein] も以後は、詩の訳の都合などやむをえない場合を除いて「10人の黒ん坊」と言うことはせず、あえて [Zehn kleine Negerlein] と記すか、後述するが「テン・リトル・インディアンズ」とかいう表現で通すことにする。とはいうものの、この「インディアン」もアメリカではすでに蔑視語になっているのかもしれないが。

以下ではそのような配慮をしつつ、ドイツにおける [Zehn kleine Negerlein] という歌の歴史、変遷、現代に至るまでの展開を考えてみたい。他愛のない一つの小さな童謡が、いろいろな形でドイツ人の心に生き延びていることを確認したいのである。

1. 二つの [Zehn kleine Negerlein]

Zehn kleine Negerlein, die bauten eine Scheune.

Das eine fiel vom Dach herab, da waren's nur noch neune.

Neun kleine Negerlein, die gingen auf die Jagd,

und eins verirrt sich im Wald, da waren's nur noch acht.

Acht kleine Negerlein, die wußten nichts von Dieben.

Der Fuchs stahl eines davon weg, da waren's nur noch sieben.

Sieben kleine Negerlein, die neckten eine Hexe.

Eines griff sie sich davon, da waren's nur noch sechse.

Sechs kleine Negerlein, die liefen ohne Strümpf'.

Eins verletzte sich den Fuß, da waren's nur noch fünf.

Fünf kleine Negerlein, die spielten einst Klavier.

Dem einen platzt das Trommelfell, da waren's nur noch vier.

Vier kleine Negerlein, die fanden einst ein Ei.
Sie zankten sich, und eins lief weg, da waren's nur noch drei.

Drei kleine Negerlein, die zogen zur Türkei.
Eines sperrt der Sultan ein, da waren's nur noch zwei.

Zwei kleine Negerlein, die kamen mal nach Mainz.
Das zweite stürzte in den Rhein, da gab es nur noch eins.

Das letzte kleine Negerlein wollt in die Fremde gehn,
da traf es auf die andern neun, so waren's wieder zehn.¹⁾

十人の黒ん坊さんたち、納屋を建てました。
一人が屋根から落っこちて、残りはあともう九人だけ。

九人の黒ん坊さんたち、狩りに出かけましたが、
一人が森で迷い、残りはあともう八人だけ。

八人の黒ん坊さんたち、泥棒って何か全然知りませんでした。
どろぼう狐が一人をさらい、残りはあともう七人だけ。

七人の黒ん坊さんたち、魔女をからかいました。
すると一人がとっつかまり、残りはあともう六人だけ。

六人の黒ん坊さんたち、靴下をはいていませんでした。
一人が足に怪我をして、残りはあともう五人だけ。

五人の黒ん坊さんたち、ある時ピアノを弾いていました。
一人の鼓膜が破裂して、残りはあともう四人だけ。

四人の黒ん坊さんたち、あるとき卵を一つ見つけました。
取り合いの喧嘩になり、一人が逃げ出し、残りはあともう三人だけ。

三人の黒ん坊さんたち、トルコへ引っ越しました。
一人がスルタンに捕まり、刑務所へぶち込まれ、残りはあともう二人だけ。

二人の黒ん坊さんたち、あるときマインツにやって来ました。
二人目がライン川に落っこちて、あともう一人しかいなくなっていました。

最後に残った黒ん坊さん、異国へ出かけようと思いました、
その時他の九人に出会い、また十人になりました。²⁾

初めに、この [Zehn kleine Negerlein] の歌を知らないドイツ人はいないと言ったが、この歌には定番というものはなく、そのメロディーや歌詞は地方によって少しずつ異なっているようだ。ただ、各地方の人がそれぞれに自分が幼い頃覚えたものを定番だと思っているふしがあり、上に挙げた例はある本から引いてきたが、その本にはこの版の出典はどこにも載っていない。わざわざ出典など挙げるまでもないほど流布していると考えているかのである。しかし、実際にはいろいろな版があることはまちがいない。その例として一つ挙げてみるが、これはヘッセン州の [Zehn kleine Negerlein] という。

Zehn kleine Negerlein aus Hessen³⁾

Zehn kleine Negerlein, die fuhren übern Rhein;
Das eine ist in's Wasser gefall'n, da waren's nur noch neun.

Ein klein, zwei klein, drei klein, vier klein, fünf klein Negerlein,
Sechs klein, sieb'n klein, acht klein, neun klein, zehn klein Negerlein.

Neun kleine Negerlein, die gingen auf die Jagd,
Das eine wurde totgeschossen, da waren's nur noch acht

Ein klein, zwei klein, drei klein

Acht kleine Negerlein, die gingen in die Rüb'n,
Das eine hat sich totgegessen, da waren's nur noch sieb'n.

Ein klein, zwei klein, drei klein

Sieben kleine Negerlein, die gingen zu 'ner Hex',
Das eine hat sie totgehext, da waren's nur noch sechs.

Ein klein, zwei klein, drei klein

Sechs kleine Negerlein, gerieten in die Sümpf',
Das eine ist d'rin stecken geblieb'n, da waren's nur noch fünf.

Ein klein, zwei klein, drei klein

Fünf kleine Negerlein, die gingen mal zum Bier,
Das eine hat sich totgetrunken, da waren's nur noch vier.

Ein klein, zwei klein, drei klein

Vier kleine Negerlein, die aßen heißen Brei,
Das eine hat zuviel gegessen, da waren's nur noch drei.

Ein klein, zwei klein, drei klein

Drei kleine Negerlein, die fuhr'n in die Türkei,
Den einen traf der Sonnenstich, da waren's nur noch zwei.

Ein klein, zwei klein, drei klein

Zwei kleine Negerlein, die fingen an zu weinen,
Der eine hat sich totgeweint, da gab es nur noch einen.

Ein klein, zwei klein, drei klein

Ein kleines Negerlein, das fuhr mal in der Kutsch,
Da ist es unten durchgerutscht, da war'n sie alle futsch.

Ein klein, zwei klein, drei klein

十人の黒ん坊さん、ライン川を渡っていた；
一人が水に落ちこちて、あとはわずかに九人。

一人、二人、三人、四人、五人の黒ん坊さん、
六人、七人、八人、九人、十人の黒ん坊さん。

九人の黒ん坊さん、狩りに出かけた、
一人が撃ち殺され、あとはわずかに八人。

一人、二人、三人 . . .

八人の黒ん坊さん、甜菜畑に出かけていった、
一人が食べすぎ死んじゃって、あとはわずかに七人。

一人、二人、三人 . . .

七人の黒ん坊さん、魔女のところに出かけて行った、
一人が魔法にかけられ死んじゃって、あとはわずかに六人。

一人、二人、三人 . . .

六人の黒ん坊さん、泥沼にはまり込み、
一人がそのまま動けずに、あとはわずかに五人。

一人、二人、三人・・・

五人の黒ん坊さん、ビールを飲みに出かけていった、
一人が飲みすぎ死んじゃって、あとはわずかに四人。

一人、二人、三人・・・

四人の黒ん坊さん、熱いお粥を食べていた、
一人がたくさん食べすぎて、あとはわずかに三人。

一人、二人、三人・・・

三人の黒ん坊さん、トルコに出かけていった、
一人が日射病にかかり、あとはわずかに二人。

一人、二人、三人・・・

二人の黒ん坊さん、わんわん泣き始め、
一人が泣きすぎ死んじゃって、とうとう一人しかいなくなった。

一人、二人、三人・・・

一人の黒ん坊さん、馬車に乗って出かけていった、
ところが下に滑落し、こうしてみんなおじゃんになった。

一人、二人、三人・・・

両方の歌詞をよく見比べてみると、共通している部分とそうでない部分があることがわかる。後者は各節の終りにその都度「一人、二人、三人、四人、五人の黒ん坊さん、・・・」のリフレインが入っているが、それを除けばそれぞれ各節2行ずつ、10節の詩で構成は同じである。その両方でテーマ的に共通しているのは第2節の「狩り」(Jagd)、第4節の「魔女」(Hexe)、第8節の「トルコ」(Türkei)であり、その他は異なっている。しかし、この共通部分と相違する部分はどうして生じたのか。それは日本の童謡などにもあることで、基本的なストーリー展開は同じでありながら、それぞれの地方でその地方ならではの物事を取り込むことでところどころ歌詞が変わってしまうということがあるのである。その歌が古くから伝えられ、広く人口に膾炙したものであればあるほど、そういう現象は起こりがちといえるのではないだろうか。この歌の場合、特にヘッセン州の方の歌にそのような傾向が顕著である。ヘッセン州の西側を流れ、昔から州の貿易等に重要な役割

を果たしてきた「ライン川」が出てくるのがその一例である。また、「ビール」はむしろバイエルン州の代名詞かもしれないが、その「ビール」に加えて熱い「お粥」が食べられるところなどは、この地方の古い食習慣を反映しているのではないかと考えることもできる。一方、初めに挙げたほうの歌は、それに比べると特にそういう地方の特色を示すような事柄はない。そのような意味では、こちらの歌の方は特定の地方性をもたない、いわば全ドイツ的なものといえるかもしれない。

さらに、両者の共通部分と相違点については、各2行ずつ踏んでいるの脚韻の影響というものを考えることもできる。つまり、それぞれ見ていくと、第1節は前者は「納屋」(Scheune)であるが、これは次の行の終りの「九人」(neune)と韻を合わせているのに対して、後者では「ライン川」(Rhein)と「九人」(neun)が同じように韻を踏んでいるからである。「九」を表すドイツ語は通常は[neun]だが、俗に多少方言がかった言い方だが[neune]という言い方もする。また、[Rhein]と[neun]の脚韻は、ドイツ語の発音をカナで書くのもおかしいかもしれないが、[ライン]と[ノイン]となり、苦しいといえば苦しいものだが、この程度の違いは文学史に名を残す正統派の詩人においてもまま見られるものである。第2節はすでに見たように両者とも同じだが、「狩り」(Jagd)が次の行末の「八人」(acht)と脚韻している。[acht] = [アハト]に対して、[Jagd]は[ヤークト]が正しいとされているが、実際には[ヤーハト]、時には[ヤハト]と発音するドイツ人の数は少なくない。第3節は「七」=[sieben] = [ズィーベン]と韻を合わせるために前者は「泥棒」=[Dieben] = [ディーベン]であるが、後者は「甜菜」=[Rüb'n] = [リューブン] (こちらは「七人」も[sieb'n] = [ズィーブン]となっている。)長くなるので以下は省くが、それに続く各節も、上に述べたような多少の違いはあるものの、各2行目の数字が「六 (sechs)」、「五 (fünf)」、「四 (vier)」、「三 (drei)」、「二 (zwei)」、「一 (eins, einen)」と下がっていくのに合わせて、それぞれ2行ずつ韻を踏んでいるのがわかるはずだ。

しかし、ここではあと、それぞれの歌の各節で起こる事件を確認しておきたい。前者では「魔女にとっつかまる」、「足に怪我をする」、「鼓膜が破裂」、「卵の取り合い」、「トルコで国王のスルタンに捕まる」、「マインツでライン川に落ちる」、「異国に出かける」である。一方、後者の歌では「魔女に魔法にかけられ死ぬ」、「泥沼にはまり込む」、「ビールを飲みすぎ死ぬ」、「お粥を食べすぎる」、「トルコで日射病にかかる」、「泣きすぎて死ぬ」、「馬車から滑り落ちる」ということになる。

さて、そうした脚韻の問題以上に大きな相違点は最終行である。両者ともあれやこれやの原因で「10人の黒ん坊」が1人減り、2人減りしていくが、前者はその最終行において、次々といなくなったはずの9人の仲間に再び出会う。それに対して、後者ではそんな喜ばしい再会もなく、最後の1人まで消えてなくなってしまうのだ。この決定的な違いがいつどのようにして起ったのだろうか。

2. [Zehn kleine Negerlein] のルーツ

この歌を聞いて（読んで）私たち日本人がすぐに思い浮かべるのは、あの「テン・リトル・インディアンズ」の歌であろう。[One little, two little, three little Indians, four little, five little, six little Indians...] というもので、日本語に訳されて歌われもしたと思う。小さい頃だれもが意味もろくに考えず無邪気に歌ったのではないだろうか。この歌は単純明快で、インディアンが1人から10人に増えていきそのまま終わってしまうものと、それとは別に今度は2番として10人から1人に減っていくものもあるようだが、いずれにしてもただそれだけの歌である。しかし、これは少し調べてみると、イギリスのいわゆる『マザー・グースの唄』に発端があることがわかり、さらに上のドイツ語の [Zehn kleine Negerlein] もこの英語の歌を受け継いだものであろうと思われるのである。

『マザー・グースの唄』に関しては平野敬一氏の名著⁴⁾があり、詳しくはそれにゆずるが、広く英米の子供たちに古くから口ずさまれてきた伝承童謡の総称であり、これをイギリスではむしろ Nursery Rhymes (ナーサリー・ライムズ) と呼ぶことのほうが多く、「マザー・グース (Mother Goose's Melody)」と呼ばれるのは主にアメリカでのことらしい。平野氏の著書はこの「マザー・グース」について日本で初めて学問的、体系的に紹介したもので、四半世紀前の当時としては画期的なものであったと思うが、その中に [Zehn kleine Negerlein] のオリジナル、つまり [Ten little nigger boys] も北原白秋の翻訳を添えて載せられている。

Ten little nigger boys went out to dine⁵⁾

Ten little nigger boys went out to dine;
One choked his little self, and then there were nine.

Nine little nigger boys sat up very late;
One overslept himself, and then there were eight.

Eight little nigger boys travelling in Devon:

One said he'd stay there, and then there were seven.

Seven little nigger boys chopping up sticks:

One chopped himself in half, and then there were six.

Six little nigger boys playing with a hive:

A bumble-bee stung one, and then there were five.

Five little nigger boys going in for law;

One got in chancery, and then there were four.

Four little nigger boys going out to sea;

A red herring swallowed one, and then there were three.

Three little nigger boys walking in the Zoo;

A big bear bugged one, and then there were two.

Two little nigger boys sitting in the sun;

One got frizzled up, and then there was one.

One little nigger boy living all alone;

He got married, and then there were none.

十人の黒坊（クロンボ）の子供

十人よ、黒坊の子供が十人よ、
お午餐（ヒル）に呼ばれて行きました。
一人が咽喉首（ノドクビ）つまらした。
そこで、九人になりました。

九人（クニン）よ、黒坊の子供が九人よ、
どの子どもどの子も朝寝坊（アサネボ）で、
一人がとうとう寝過ごした。
そこで、八人になりました。

八人よ、黒坊の子供が八人よ、
一緒にデボンを旅してて、
一人が途中で留まった。
そこで、七人になりました。

七人よ、黒坊の子供が七人よ、
杖（ステッキ）伐（キ）りにと行ったらば、
一人が真二つに腹切った。
そこで、六人になりました。

六人よ黒坊の子供が六人よ、
蜂の巣いじってつい遊び、
一人が熊蜂に螫（サァ）された。
そこで、五人になりました。

五人（ゴニン）よ、黒坊の子供が五人よ、
喧嘩して御訴訟（オソショウ）を起（オココ）した。
一人が裁判所へ行きました。
そこで、四人になりました。

四人（ヨォニン）よ、黒坊の子供が四人よ、
 みんなで海へと出かけたら、
 赤い鯡（ニシン）に一人が呑（ノォ）まれ、
 そこで、三人になりました。

三人よ、黒坊の子供が三人よ、
 こんどは動物園へ行ったらば、
 大きな熊奴（クマメ）が一人を引っ抱え、
 そこで、二人になりました。

二人よ、黒坊の子供が二人よ、
 てんとさんの中へと坐り込み、
 一人がちぢれて焼け死んだ。
 そこで、一人になりました。

一人（ヒィトリ）よ、黒坊の子供が一人よ、
 いよいよ、たった一人よ、
 その子がお嫁取りに出て行った。
 そこで、誰（ダァレ）も無くなった。

（北原白秋訳）

平野氏はこの白秋の訳について、「苦心の訳であるが、必ずしも正確でない」とし、こう訂正している。

第二節二行目「朝寝坊で」を「夜ふかしで」、第四節二行目「杖（ステッキ）」を「薪（タキギ）」、第九節二行目「てんとさんの中へと」を「日なたに」、というふうにもすれば原文の意味にいくらか近くなるだろう。第六節は、全体に意味を取り違えている。（原意は「五人が法曹界入りを希望したが一人が困ったことになり、あと四人になった」）。⁶⁾

そして、その前後でこの歌に関する経緯を述べている。

「テン・リトル・インディアンズ（原文は Injuns）」のほうは作者がアメリカ人セプティマス・ウィンナー、発表は一八六八年、「ニガー・ボーイズ」のほうは作者がイギリス人フランク・グリーン、発表一八六九年（あるいは六八年末）、とこの二つの唄が相前後して世に出た。（途中略）この唄（テン・リトル・ニガー・ボーイズ）は、その半年ほどまえに発表された「テン・リトル・インディアンズ」に刺戟されて作られたいわば二番煎じなのである。インディアンを黒ん坊に変え、前の唄にあった「ワン・リトル、ツー・リトル、スリー・リトル……」というリフレイン部を止めただけで、構想はまったく同じ、芸のない模倣といってもいいものである。

しかし、黒人の子供のほうが、インディアンよりイメージとしておもしろいし、また作者がイギリス人であるという点がおそらく買われたのだろう、この二番煎じのほうが人気をえて広く流布した。（途中略）ところが、アメリカの黒人問題がだんだんやかましくなるにつれて、当初むぞうさに使われていた「ニガー」という表現が、忌避されるようになったのである。⁷⁾

長い引用になってしまったが、この説明により「インディアンズ」の版と「ニガー・ボーイズ」の版との関係がわかってすっきりする。平野氏は同著では「ニガー・ボーイズ」の方しか紹介していないが、では「インディアンズ」の詩はどうなっているのか、大差はないだろうと思いつつも、気になるので調べてみると次のようである。

Ten little Injuns⁸⁾

Ten little Injuns standing in a line,
 One toddled home and then there were nine.
 Nine little Injuns swinging on a gate,
 One tumbled off and then there were eight.

One little, two little, three little,
 four little, five little Injun boys,
 six little, seven little, eight little,
 nine little, ten little Injun boys.

Eight little Injuns gayest under heaven,
 One went to sleep and then there were seven.
 Seven little Injuns cutting up their tricks,
 One broke his neck and then there were six.

Six little Injuns kicking all alive,
 One kicked the bucket and then there were five.
 Five little Injuns on a cellar door,
 One tumbled in and then there were four.

Four little Injuns up on the spree,
 One he got fuddled and then there were three.
 Three little Injuns out in a canoe,
 One tumbled overboard and then there were two.

Two little Injuns fooling with a gun,
 One shot to other and then there was one.
 One little Injuns livin' all alone,
 He got married and then there were none.

十人のインディアンの少年

十人のインディアン、一列に並んだが、
 一人がよちよち歩いて帰り、それで九人になっちゃった
 九人のインディアン、門の上で身体を揺すっていたが
 一人が転がり落ちて、それで八人になっちゃった

一人、二人、三人、
 四人、五人のインディアンの少年
 六人、七人、八人、
 九人、十人のインディアンの少年

八人のインディアン、青空の下とても陽気にしていたが
 一人が寝てしまい、それで七人になっちゃった
 七人のインディアン、いたずら三昧していたが
 一人が首の骨を折り、それで六人になっちゃった

六人のインディアン、なんでもかでも蹴るとばし
 一人がバケツを蹴って首括り、それで五人になっちゃった
 五人のインディアン、地下室のドアの上にはいたが
 一人が中に落っこちて、それで四人になっちゃった

四人のインディアン、飲んで浮かれ騒いでいたが
 一人が酔いつぶれて、それで三人になっちゃった
 三人のインディアン、カヌーに乗って出かけたが
 一人が水中に転がり落ちて、それで二人になっちゃった

二人のインディアン、鉄砲をいじくり回していたが
 一人がもう一人を撃ち殺し、それで二人になっちゃった
 一人のインディアン、独り寂しく暮していたが
 まもなく誰かと結婚し、それで誰もいなくなっちゃった⁹⁾

英語の歌の方の二つの歌詞も、各節で事件が起こる。これも一通りなぞっておいてみると、イギリス人が作ったという前者の「ニガー・ボーイズ」の方では、「食事でのどをつまらす」、「寝過ごす」、「旅行途上その場にとどまる」、「薪を切りそこなって腹を切る」、「蜂の巣を突ついて熊蜂に刺される」、「法律を学ぶのはいいがパクられる」、「海でニシンに飲み込まれる」、「大熊に抱き殺される」、「日射病になる」、「結婚する」となる。また、アメリカ人の「インディアンズ」の歌の方では、「家に帰ってしまう」、「門の上から落ちる」、「寝てしまう」、「首の骨を折る」、「首吊り自殺をする」、「地下室へ落ちる」、「酔いつぶれる」、「カヌーで溺死する」、「ピストルを誤射する」、「結婚する」というものである。いかげんな言い方かもしれないが、この英語の二つの歌も韻を合わせる関係で、いわば思いつきのいろいろな事件を持ち出している。しかし、ドイツの二つの歌をも合わせて

再度考えてみると、英・米・独それぞれの国民性というか、お国柄が出ているように思えるのは気のせいだろうか。例えばドイツの歌では、「狩り」に出かけたり、「魔女」が登場したりして、いかにもヨーロッパ大陸的であり、さらにはドイツ最大の河川「ライン川」や、比較的近い国である「トルコ」が出てきたり、あるいは「ビール」ががぶ飲みされるのもドイツならではの感じだ。それに対して、イギリスの歌の方はこれと違って特徴は認められないかもしれない。島国だから「ニシン」が出てくるというのはいささかこじつけ気味で説得力に欠けるだろう。だが、「インディアンズ」の歌では「カヌー」が登場し、また「ピストル」をもてあそんだりするところはまさにアメリカという感じがするし、あちこちでやたらと「落ち」たり、「首の骨」を折ったり、「首吊り」をしたりするのもアメリカ的だといったら、それはアメリカに対する偏見というものだろうか。しかし、そうした残酷なシーンからも、細かいことに拘泥せず、死をも恐れず開拓していったスケールの大きい国民性を見ることはできるだろう。

さて、話が横にそれてしまったが、この二つの英語の歌の結末は、いずれも「結婚」することによって「誰もいなく」なるというものである。先の二つのドイツ語の歌のうち、「結婚」は別として最後に誰もいなくなるという点で見ると、二つ目に挙げたヘッセン州の[Zehn kleine Negerlein]がオリジナルを踏襲していることになる。すでに見たようにもう一方のドイツ語の歌は英語のオリジナルとは異なり、最後にみんなが戻ってくるハッピーエンドになっている。これはおそらく、愛らしい登場人物が次々といなくなり、さらに最後「誰もいなく」なるという結末は、もともと幼い子供のためのものとしてのこの歌にはふさわしくないという配慮が働いたのではないだろうか。それはもちろん、この歌がドイツに入ってきてから起きた現象だということを言いたいのではなく、確認してはいないが、すでに英語圏でこの歌が流布していく過程でそのような配慮が働き結末を変えた版があるということも十分考えられる。無邪気な子供のための歌という図式で考えるなら、最後に全員がまた勢ぞろいという結末のほうが健全であると言えるかもしれない。しかし、この歌は全く別の解釈で取り上げられることもある。

『そして誰もいなくなった』とは推理小説の巨匠アガサ・クリスティーの作品であることは、推理小説ファンならずとも多くの人が周知していると思うが、この小説が1939年にイギリスで出たときの原題は[Ten Little Niggers]だった。これが翌年アメリカで出版されたとき、[Nigger]の蔑視語を避けて[Ten Little Indians, And Then There Were None]とし、さらにはこの[Indian]も避けようとしたのか、単に[And Then

There Were None] となり、日本でもこれを取り『そして誰もいなくなった』という題名になったということである。¹⁰⁾ この小説の初めの方に [Ten Little Niggers] の歌が出てくるが、これは白秋の訳を付けてすでに載せた [Ten little nigger boys] の詩とほぼ同じ展開である。しかし、そこで [nigger boys] となっている部分は、全て [Indians] に変えられている。また、最終節で「結婚」ではなく、「首をくくる」ことによって「誰もいなく」なってしまうところが大きく異なっている。この変更は、一つところに集まった10人の登場人物が1人ずつ殺されて（または死んで）いき、通常の推理小説なら最後に残った者が犯人となりそうなところを、その最後の人物まで自殺して死んでしまうという不可解な結末のストーリーにするために、作者のクリスティーが加えたものであろう。クリスティーのこの作品についてこれ以上述べることはしない。ただ、1930年代というごく新しい時代にできた小説ではあるが、この中に出てくる [nigger boys] ないしは [Indians] の歌も、後のこの童謡の歌詞の変更、変遷に影響を与えているのではないかとということを付け加えておく。

以上、ドイツにおいて子供の頃から歌われ、広く知られる [Zehn kleine Negerlein] の童謡は、各地にいろいろな歌詞で残っているが、その歌詞の違いは単にその脚韻が原因であるばかりでなく、それ以前すでにイギリスやアメリカで歌われていた童謡の影響を受けている。言い替えるならこの歌のルーツはドイツではなく、通常「マザーグースの唄」といわれる英米の童謡集に遡ることができ、この童謡自体がさらにその後、推理小説の題材など、すでに英米においてさまざまな形で取り上げられてきたことの影響も受けているということを再度述べて、第1章とこの第2章のまとめとする。

3. [Zehn kleine Negerlein] の面白さの理由とドイツにおける展開

さて、[Zehn kleine Negerlein] という童謡は詩を読めばすぐにわかるとおり一種の数え歌である。とはいうものの、「数え歌」というものが歌のジャンルとしてドイツにあるのかは定かでない。「数え歌」はドイツ語では [Abzählreim] だと思うが、これはしかし、子供の遊びで鬼を決めるときに歌われるものらしい。おそらく、歌に従いながら順に数を唱えていって、ある特定の数に当たった者が鬼となるものだろう。日本の「手鞠歌」に多い数え歌、つまり「ひとつとせ・・・」と鞠をつきながら口ずさむのと似ているといえれば似ているし、いささか趣を異にするということもできるだろう。

それはともかく、数え歌というものを考えるとき、それは通常1から順に増えていき、

たいていは10くらいで終りになるのだが、その気になればいくらでも数を増やし、延々と続けることができる。しかし、この[Zehn kleine Negerlein]の場合は、逆に10から始まり、カウントダウンしていき、最後の最後にはまた全員勢ぞろいか、そのままゼロになってしまうかのどちらかである。この歌の面白さはまさにこの点にあり、仮にこの歌が他と同様に1から増えていくものであるとしたら、もはや何の存在価値もないといってもいいくらいである。その意味でこの歌を「降順の数え歌」と呼びたい。すでに見てきたように、どの歌でも登場人物が一人一人死んで（消えて）いく。たかが無邪気な童謡とはいえ、そこに何ともいえない不気味さが潜んでいるのである。だからこそ、アガサ・クリスティなどもそれに魅せられ、その作品の一つに用いたことはすでに見てきたとおりである。

人間というものはもともと怠惰なものでありながら、それでいて怠惰のままでいられない。ゼロから始まって、少しずつお金をためたり、業績を1つ、2つと重ねていったり、そういうことに生きがいを見い出す。しかし、よくよく考えてみれば真実は逆であるともいえる。誕生の時に与えられるもの全てを与えられ、後はそれを日一日と消費していただく。お金をいくら蓄えたとしても、また業績をいくら増やしていっても、やがて来るべきときは来る。積み重ねというものは、そういう意味ではなんともはかないものである。だが、私たち人間はそれを真実とは考えたくない。そう考えるのが怖い。私たちは、自分に与えられた生命がどれほどの長さか短さか知る由もない。だから、私たちは見て見ぬふりをして、ひたすら努力するのである。しかし、その努力とは何のためなのか、何に向けられたものなのか。それも結局わからない。否定的に考えても始まらないから、ともかく積極的に生きていこう。これは「昇順」思考といえるものである。先に名付けた「降順の数え歌」は、そうした私たちの通常の考え方の反対側にある、もう一つの考え方を思い出させてくれるものなのである。

ところで、この種の数え歌の中から、こんどは「昇順」の例を見てみたいと思う。

Das Bärenorchester

熊のオーケストラ

Ein kleiner Bär,
der trommelte allein,
kam einer, der Gitarre spielte,
schon war'n sie zu zwein.

1匹の小さな熊さん、
ひとりで太鼓を叩いてた、
そこにもう1匹やって来て、ギターを弾いた、
これでもう2匹になった。

Zwei kleine Bären,
die nahmen einen mit,

2匹の小さな熊さん、
もう1匹連れてきた、

der blies die Mundharmonika, da waren sie zu dritt.	これはハーモニカをふいた、 これでもう3匹。
Drei kleine Bären, die tranken Honigbier kam einer mit 'nem Saxophon, da waren sie schon vier.	3匹の小さな熊さん、 ハニー（蜂蜜）ビールを飲んでいて、 そこにもう1匹サクソホンをもってやって来た、 これでもう4匹。
Vier kleine Bären, die hatten sehr viel Spaß, als fünfter kam ein kleiner Bär mit einem Kontrabaß.	4匹の小さな熊さん、 とっても楽しくやっていた、 5番目にはコントラバスをもった 小さな熊さんがやって来た。
Fünf kleine Bären. die trafen unterwegs 'nen Bären, der die Flöte spielte, und schon war'n sie sechs.	5匹の小さな熊さん、 外出中、フルートを吹く 熊さんに出会い、 これでもう6匹。
Sechs kleine Bären sind sechse nicht geblieben, kam einer, der die Tuba blies, da waren sie schon sieben.	6匹の小さな熊さん 6匹のままではいなかった、 もう1匹がやって来て、チューバを吹いた、 これでもう7匹。
Sieben kleine Bären, die haben sich gedacht, noch einer fehlt, und das bist du, dann sind wir nämlich acht.	7匹の小さな熊さん、 とくと考えこんだ、 何かもう一つ足りない、そうそれは君だ、 これで僕らは8匹（人）だ。

これはドイツはドルトムントのクラウス・W・ホフマン (Klaus W. Hoffmann) が作詞・作曲し、自ら歌う『熊のオーケストラ』¹¹⁾ という歌である。ホフマンは1947年に生まれ、電算処理のエキスパートとして働くかたわら、童謡の作者としても知られるようになったいささか変わった経歴の持ち主である。彼は実際的な子供とのふれあいを通じてその心を知り、本当に子供たちの喜ぶ歌を作っている。上に挙げた歌も、とにかく動き回らずにはいられない子供のもつ性質や、楽しく遊びたい気持ちをうまく捉えて作られたものであるが、その歌詞をみると [Zehn kleine Negerlein] と同じ構成であることがわかる。しかし、すでに述べたように、これは同じ数え歌でも「降順」ではなく、「昇順」である。まず「太鼓」を叩く熊がいて、それに「ギター」を弾く熊が1番で加わる。それが2番に

入ると、その太鼓とギターが実際に歌の伴奏に加わる。さらに2番では、同じように「ハーモニカ」をふく熊がこの2匹に加わり、今度は3番の伴奏にハーモニカも加わる。さらに「サクソホン」、「コントラバス」、「フルート」、「チューバ」という具合に、次第に楽器の数が増え、最後には「何かもう一つ足りない、そうそれは君だ、これで僕らは8匹（人）だ」と歌われ、オーケストラの大合奏になる。かわいい熊の楽団に、人間である「君」も仲間入りが許されて、最高に盛り上がったところで歌が終るのである。子供たちはこの歌に合わせて、あるいはこの歌を歌いながら、ゲームとして実際に身体を動かし「熊のオーケストラ」の輪の中に加わっていくのであろうが、1人また1人と増えていく様子はとにかくやたらと楽しいのである。これは「昇順の歌」のなせる業とっていいだろう。もちろん、歌というものには通常は音楽が付くわけだから、それによって暗い感じの曲調にすることはもちろん可能である。例えば、この章の初めに述べたような「ひとつとや」とか「ひとつとせ」方式の日本の手鞠歌などは「昇順」でありながら、そのメロディーはどれもみなある種の暗さを帯びている。それはしかし、歌詞の内容に合わせて曲を暗くしているというよりも、西洋音楽の影響のまだない時代の日本音階のもつ独特な短調的な響きから来るものということができるだろう。西洋音楽の枠内で考えた場合、長調と短調のいずれが「昇順の歌」に適しているかについては異論を差し挟む余地はない。

そのようなわけで、逆に「降順の歌詞」には短調の曲が合うということができる。その代表例を一つ挙げてみたい。これは[Zehn kleine Negerlein]の一種のパロディー、替歌といえるものである。

Zehn kleine Fixer¹²⁾

Zehn kleine Fixer war'n in einem Boot,

Ozean Verzweiflung, Heimathafen Tod.

Einer sprang über Bord und sank wie ein Stein.

, Scheiße , war sein letztes Wort.

Da warn's nur noch neun.

Neun kleine Fixer, Mädchen auch dabei;

eine war erst dreizehn Jahr, kam schon nicht mehr frei.

Ging dann auf den Fixerstrich - kalte Winternacht.

Himmel! Sie verkühlte sich.

Da warn's nur noch acht.

十人の小さなフィクサー

10人のフィクサーがある時ボートに乗っていた

絶望という大洋（ウミ）、帰港地は死。

一人が波に飛び込んで、石のように沈んでいった。

「シャイセ」というのが彼の最後の言葉だった。

こうしてあとはもう9人。

9人のフィクサー、そこには女の子もいた

一人はようやく13才、でももう特別扱いはされない

それで麻薬代稼ぎに身体を売りに。冷たい冬の夜だった

あわれ、彼女は風邪をこじらせてしまった。

こうしてあとはもう8人。

Acht kleine Fixer, einer aus dem Knast.	8人のフィクサー、一人は刑務所あがり。
Der Bewährungshelfer hat ihm einen Tritt verpaßt.	彼は保護監察官に見放され、
Therapeut - keine Zeit. Eltern - abgeschrieb'n.	臨床医は時間がないといい、両親からは勘当同然。
Wußte keinen Ausweg mehr.	どうにも逃げ道がなくなった。
Da warn's nur noch sieben.	こうしてあとはもう7人。
Sieben kleine Fixer hatten es so satt	7人のフィクサーはもううんざりしていた
in der Wüste Einsamkeit, im Getto Hochhausstadt.	砂漠には孤独、ゲットーには摩天楼。
Einer, sagt man, ist erstickt nur an Wein und Keks.	一人はワインとクッキー、それに憐れみのなさが原因で
und an Mitleidlosigkeit. Da warn's nur noch sechs.	窒息死同然とのこと。こうしてあとはもう6人。
Sechs kleine Fixer. Einer machte Schluß	6人のフィクサー、一人がその命にけじめをつけた
auf dem Klo, Bahnhof Zoo, mit dem Goldnen Schuß.	ツォー駅のトイレで、黄金の一撃、麻薬の注射。
So ein Penner, der ihn fand, nahm sich	彼を見つけたペンナーは靴と靴下を取っていった
Schuh und Strümpf,	
denn die brauchte der nicht mehr.	なぜなら、彼にはもうそれは必要ないから。
Da warn's nur noch fünf.	こうしてあとはもう5人。
Fünf kleine Fixer, ganz auf sich gestellt,	5人のフィクサー、助けもなく孤立した、
hatten keine Hoffnung mehr, hatten auch kein Geld.	何の希望もなかったし、ましてやお金もありゃしない。
Einer ging in eine Bank, fragte den Kassierer.	一人が銀行へ行行って、出納係に頼んだが
Dieser zögerte nicht lang. - Da warn's nur noch vier.	ほどなく警察に通報された。こうしてあとはもう4人。
Vier kleine Fixer war'n in einem Boot,	4人のフィクサーがある時ボートに乗っていた
Ozean Verzweiflung, Heimathafen Tod.	絶望という大洋（ウミ）、帰港地は死。
Einer gab den Dealer an bei der Polizei.	一人がディーラーを警察に密告した。
Als der wieder draußen war, da warn's nur noch drei.	これが娑婆に戻ったとき、残りはあとはもう3人だけ。
Drei kleine Fixer auf der letzten Tour.	最後の周遊に出ていた3人のフィクサー。
Und die hatten jetzt zu dritt eine Ladung nur.	彼らにはもう3人に一回分の薬（ヤク）しかなかった。
Ach, das Heroin ging aus, es kenterte das Boot.	そう、ヘロインは底をつき、ボートは転覆。
Liebe war nie ihr Zuhause' - und nun war'n sie tot.	愛に暖かく包まれることなく、彼らは死んでしまった。
Zehn kleine Fixer war'n jetzt alle weg.	10人のフィクサーはこうしてみんないなくなった。
Ausschußware, Großstadtmüll, nur der letzte Dreck.	できそこないの不良品、大都会のくず、仕様のない役
Doch wie lange wollt ihr denn untern Teppich keh'r'n?	たたず。－けれどもいつまでも黙ってはいないだろう。
Wenn die wieder aufersteh'n, werden sie sich wehr'n.	今度彼らが生き返ったなら、彼らは抵抗するだろう。

これはゲオルク・ダンツァー (Georg Danzer) というオーストリア出身のリーダーマッハーが作った歌である。リーダーマッハーとはドイツ語圏の国々において商業ベースに乗ることなく独自の考え方のもとに活動している一連のミュージシャンをいい、その創作態度や行動様式を説明するのは容易なことではない。それゆえ、ここでは単にいわゆるシンガー・ソング・ライターと理解してもらえばいいかと思う。ダンツァーはそうしたリーダーマッハーとして一家をなした者の一人である。彼も先のホフマンの1年前、1946年にウィーンで生まれ、すでに20才頃から音楽活動を始めているが、中でも特に70年代後半から80年代の初めにかけては、社会批判的、政治批判的の歌を多く書き高い評価を得るとともに、オーストリアばかりでなく、ドイツにおいても絶大な人気を博した。現在は往日の勢いはないが、それでもなお地道に活動を続けている。上に挙げた『十人の小さなフィクサー』はダンツァーが1979年に出した『繊細なる人々 (Feine Leute)』というアルバムに収められている。つまり、彼が最も過激にアンガージュマンしていた頃の作品とすることができる。

原文と共に訳詞も一通り読んでいただきたいが、その中には日本語に訳そうとすると言語のニュアンスが失われるかぼけてしまうためドイツ語をそのままカタカナで置いた語句がいくつかあるので、それについて説明しておきたい。まず、この歌の主題となっている「フィクサー (Fixer)」であるが、これは「麻薬の依存者、中毒者、常用者」のことである。この語はおそらくもともとは英語から来たものと考えられるが、英和辞典¹³⁾で確かめてみると「(事件を買収などで) もみ消す人、贈賄者、代弁者、仲介人」などの意味があり、そこからさらに俗語で「麻薬密売人」という意味が出てくる。これがドイツ語ではなぜ「売る方」ではなく「麻薬の常習者」になってしまうのか考えてみるとおかしな感じもする。しかし、日本語でも例えば英語の原義を取り違えてカタカナに直し、それが誤ったまま定着してしまうということは多々あると考えられるので、それほど気にする必要はないのかもしれない。いずれにしても、この語はドイツ語では「たとえ高額を費やしてでも麻薬を手に入れずにはいられない人間」を表すものである。次に、まず最初に死んでいく男が実際に口にする「シャイセ (Scheiße)」という言葉がある。これはもともと「糞、糞便」を意味する。これが口語で「くそっ!、くそったれ!」というような意味合いで特に若い人たちの間で使われるようになった。あまりきれいな言葉とはいえないが、ドイツにいとけっこうよく耳にするものである。日本語の場合も、ちょうど同じような推移が考えられるのはおもしろい。また、第4節に出てくる「ゲッター (Getto)」であるが、

この言葉ですぐに思い出すのは、第二次世界大戦前、ナチス・ドイツがユダヤ人を追い立てて、ドイツ人から隔離するように住ませた「強制居住地区」である。この言葉の歴史は古く、そのような意味で使われるようになったのは中世以後のことで、それ以前はユダヤ人がみずからの意思で居住する区域を表したという。さらに現在では、「人種的、宗教的な少数派が強制的に隔離されている場所」や「精神的抑圧、政治的弾圧を受けている生活」をも意味するらしい。¹⁴⁾ ここではそうしたことを考慮して、多少意味はずれるかもしれないが、「スラム街」に近いものと理解しておけばよいだろう。さらに、次の第5節の「ペンナー (Penner)」は特に都会に住む「浮浪人、無宿者」のことで、道行く人に小銭をせびったり、せびったお金で酒を買い飲んだくれているような輩と考えればいい。失業率の高いドイツ（現在は12%を超す）では、職を失いこうした境遇に追い込まれていく人の数は少なくない。最後に第7節の「ディーラー」に関してであるが、これが先の「フィクサー」に対しての「麻薬の密売人」ということになる。これも英語から入ってきた言葉である。

さて、この歌は、上で説明してきた語句を見ていくだけでもわかると思うが「麻薬中毒者」に関するものである。内容も内容であるが、ダンツァーがこれにつけた曲はこれ以上ないほど暗い。例によって、初め10人いる麻薬中毒者が次々と死んでいく「降順の数え歌」だが、その過程で彼らがその生活の中で遭遇するさまざまな悲惨な出来事が語られていく。幻覚に朦朧としてか、あるいは薬の切れた苦しみに耐えられず自殺する者、高い麻薬代を稼ぐために売春に走る女性、更生の可能性もなく親からも見放されていく者、不衛生きわまりない駅の便所で注射を打ち死んでいく者、銀行でお金を借りることなどできるはずはなく、また、自分の追い込まれた境遇の原因が麻薬密売人にあると悟り、それを警察に密告しても、このディーラーは軽い刑期を終えすぐに出獄する。その後には、マフィアの復讐が待っている。つまり、逆に抹殺されるのである。こうして、最後には全員が死んでしまう。ゲオルク・ダンツァーはこうした彼らの運命の原因として、彼らを思いやる愛の欠如を挙げている。彼にとって、麻薬中毒者の生活は果てしない海の上にポカンと浮かぶ小さなボートのようなものである。それは、全く逃げ場のない状況であり、また、極めて心もとないものである。そして、彼らを取り巻く環境は「絶望という大洋、帰港地は死」である。救いの手を差し伸べてくれる者などいない。それどころか、彼らに張られたレッテルは「できそこないの不良品、大都会のくず、仕様のない役たたず」なのである。なんとも暗澹たる内容であるが、ダンツァーは歌の最後でこう歌う。「けれどもいつまで

も黙ってはいないだろう。今度彼らが生き返ったなら、彼らは抵抗するだろう」と。つまり、彼らは好んでこうした境遇に身を置いたわけではないし、できることならこの泥沼から抜け出したいと思っている。しかし、彼らにはめられた社会の枠はそれを容易には許そうとしない。原因はもちろん麻薬に溺れる彼ら自身にもあるが、同時にそういう状況に彼らを追い込んで、しかもやり直しの可能性すら奪ってしまう世間の目、つまり彼らを犯罪者としてしか見ようとする社会の冷たい態度にも問題がある。ダンツァーはこうした麻薬問題を個人の責任としてばかりでなく、社会全体の中で考えていくべきであると訴えているのである。

4. [Zehn kleine Negerlein] のドイツにおける展開 (続)

本章では、ひき続きもう一つ別の歌を例として挙げてみたい。しかし、その前に、上で挙げた問題、つまりドイツにおける麻薬の問題について少々述べておきたい。ドイツにおいて麻薬による年間の死者数が初めて100人を超えたのは1972年のことで、その数は104人であった。その後も死者数は増え続け、8年後の1980年には494人、さらにその8年後の1988年は670人。翌1989年はベルリンの壁が崩れ、東西の冷戦関係に風穴が開いた年であるが、この年の死者は991人。また、東西統一の1990年になると旧東ドイツ地区も合わせて数えられているらしく一挙に増加し1479人、1991年は2026人と激増している。もともと麻薬がドイツに上陸したのは駐留していた米軍によるもので、それは1960年代のことだという。そのマーケットはたちまち拡がり、1968年にはマリファナやハシーシュなど危険性の少ないものと並び、強度で危険なLSDやヘロイン、コカインなどがすでに出回っていた。そして、1972年の時点でヘロインの中毒者は1万人に達しており、1980年には少なく見積もっても6万人、その後の資料は持ち合わせていないが極端に減少していることは考えにくい。というのも、適切なカウンセリングや治療施設がまだまだ不十分らしいからだ。

むろん、こうした麻薬蔓延の経過に当局が何の対策も立てなかったわけではなく、事態を深く憂えて、早くからさまざまな警告を発してきた。その警告の趣旨は、ヘロインやコカインなど強い麻薬の服用には多額のお金がかかるばかりか、最後には自分の生命をも代償にすることになるということである。また、「身体をだめにするのはあなた自身、金庫に札束を詰め込むのは売人」というようなスローガンを掲げて、麻薬撲滅のキャンペーンも行ったらしい。しかし、そうした対策もそれほどの効果は発揮しなかったのであろう。

中毒者の悲惨な末路は、いわゆる「クリスティアーネ・Fの物語」に象徴的である。これは、グラビア雑誌の『シュテルン (Stern)』が1978年にスタートした「我らツォー駅の子供たち」というシリーズで、中毒者のインタビューを録音テープに収めた記録である。そこには当時まだ東西に分かれていたベルリンの西側で、16才のクリスティアーネ・Fという少女が麻薬に溺れていく様子が描かれている。このレポートは麻薬依存の様子と、麻薬ほしさに犯罪や売春に走る悪循環が克明に記録されている。その衝撃的な内容ゆえにこの物語は1981年には映画化までされている。青少年の間に拡がる麻薬乱用の問題にもっと真剣に取り組むべきであることを指摘した点、また、それ以上に麻薬中毒者と売人の世界の実態を一般に広く知らしめたいという点で評価できるものではある。だが、この深刻な問題はいまだに解決するどころか、12、3才の子供まで麻薬に手を出すという低年齢化なども含め、その根の深さがますます浮き彫りにされるばかりなのである。¹⁵⁾

麻薬問題、特にその青少年に及ぼす影響については対象が大きすぎるので、いずれまた別の機会に考えてみたいと思っている。今は次の歌に移ろうと思う。この歌はトーテン・ホーゼン (Die Toten Hosen) というドイツの人気ロック・グループのもので、『10人のイェーガーマイスター (Zehn kleine Jägermeister)』という題名である。これも先のダンツァーの歌と同様に「降順の数え歌」であり、やはり [Zehn kleine Negerlein] のパロディーになっている。ここでも麻薬を初めとするドイツ社会に見られるいくつかの問題が出てくるが、それが歌の枠組みにうまく収まっていることを見てほしい。かなり長い歌詞であるが全文を載せてみたい。

Zehn kleine Jägermeister¹⁶⁾

Ein kleiner Jägermeister war nicht gern allein
drum lud er sich zum Weihnachtsfest neun Jägermeister ein
zehn kleine Jägermeister rauchten einen Joint
den einen hat es umgehaun, da warens nur noch neun
neun kleine Jägermeister wollten gerne erben
damit es was zu erben gab, mußte einer sterben
acht kleine Jägermeister fuhren gerne schnell
sieben fuhren nach Düsseldorf und einer fuhr nach Köln

Einer für alle, alle für einen

wenn einer fort ist, wer wird denn gleich weinen
 einmal trifftts jeden, ärger dich nicht
 so gehts im Leben, du oder ich

Sieben kleine Jägermeister warn beim Rendezvous
 bei einem kam ganz unverhofft der Ehemann hinzu
 sechs kleine Jägermeister wollten Steuern sparen
 einer wurde eingelocht, fünf durften nachbezahlen
 fünf kleine Jägermeister wurden kontrolliert
 ein Polizist nahms zu genau, da warn sie noch zu viert

* Einer für alle, alle für einen
 wenn einer fort ist, wer wird denn gleich weinen
 einmal trifftts jeden, ärger dich nicht
 so gehts im Leben, du oder ich

Einmal muß jeder gehn
 und wenn dein Herz zerbricht
 davon wird die Welt nicht untergehn
 Mensch ärger dich nicht *

Vier kleine Jägermeister bei der Bundeswehr
 sie tranken um die Wette, den besten gibts nicht mehr
 drei kleine Jägermeister gingen ins Lokal
 dort gabs zwei Steaks mit Bohnen und eins mit Rinderwahn
 zwei kleine Jägermeister baten um Asyl
 einer wurde angenommen, der andre war zu viel

* ~ * (2mal Refr.)

Ein kleiner Jägermeister war nicht gern allein
 'drum lud er sich zum Osterfest neun neue Meister ein

10人のイエーガーマイスター

1人のイエーガーマイスターは独りぼっちでいたくありませんでした
 そこでクリスマスのパーティーに9人のイエーガーマイスターを招きました

10人のイエーガーマイスター、ある時ジョイントを吸いました

それで1人がやられて、残りはあともう9人だけ
 9人のイエーガーマイスター、ある時遺産を相続したくなりました
 相続するものを作るためには1人が死ななければなりませんでした
 8人のイエーガーマイスターはスピード狂でした
 7人はデュッセルドルフへ行きましたが、1人はケルンに行ってしまいました

1人の存在はみんなのため、みんなの存在は1人のため
 1人が去ったとて、いったい誰がすぐに泣く？
 怒りなさんな、誰にもいつかは番が回ってくる
 人生なんてそんなもの、君の番それとも僕の番？

7人のイエーガーマイスター、ある時不倫に出かけていました
 そのうち1人は、やばいことに相手の連れ合いと出くわし袋叩き
 6人のイエーガーマイスター、ある時税金をけちろうとしました
 1人が監獄にぶち込まれ、5人は追徴金を払いました
 5人のイエーガーマイスター、ある時取り調べを受けました
 ある警官はあまりに手厳しく、それでも彼らはまだ4人連れ

* 1人の存在はみんなのため、みんなの存在は1人のため
 1人が去ったとて、いったい誰がすぐに泣く？
 怒りなさんな、誰にもいつかは番が回ってくる
 人生なんてそんなもの、君の番それとも僕の番？

誰もがいつかは去らねばならない
 その時君の心が張り裂けたとしても
 それでこの世が没落することなどありゃしない
 ほらほら怒りなさんなよ *

4人のイエーガーマイスター、ある時ドイツ連邦国防軍に行っていました
 そこで彼らは一気飲み大会、一番飲んだ者は今はもういません
 3人のイエーガーマイスター、ある時食堂に出かけました
 そこにあったステーキは2つはいんげん豆添え、1つは狂牛病の肉付き
 2人のイエーガーマイスター、ある時亡命庇護を求めました
 1人は受け入れられましたが、もう1人は突っぱねられました

～ (2回繰り返す)

1人のイエーガーマイスターは独りぼっちでいたくありませんでした
 そこでイースターのパーティーに9人の新しいイエーガーマイスターを招きました

トーテン・ホーゼンについては本誌第3号で取り上げた¹⁷⁾ので、詳しくはそれを参照していただきたい。上の曲は1996年の2月に発売され大ヒットした彼らの14枚目のアルバム『民衆のための阿片 (Opium fürs Volk)』の中の最後の歌である。ここでもまず、訳詞の補足をしておきたい。この歌のタイトルにもなり、主役でもある「イエーガーマイスター」は直訳すれば「猟師の親方」ということになるが、以下に繰り広げられる出来事と猟師の親方が何の関係があるのか、考えてもよくわからない。この原義よりも「イエーガーマイスター」と聞いてドイツ人がすぐに思い浮かべるのは、あるお酒の銘柄ではないだろうか。リキュールというのか蒸留酒というのか種類はよく知らないが、どろどろした甘さの中に少々苦みの混じった葉草酒である。スーパーやキオスクで20～30ccの小瓶のものから、何百ccという通常の大きさのものが売られている。いろいろな銘柄があるが、この種のお酒の中では「イエーガーマイスター」がトップシェアを握っているようだ。それと関係あるのかどうかかわからないが、この歌の「イエーガーマイスター」はドイツ人に聞いてみると、どうやら「アルコール中毒者、飲んだくれ」のことらしい。それを前提に歌詞を読んでいってみると全体として自然な流れになりそうだ。彼らがしでかす事件はみなばかげたものである。順に見ていくとまず、「ジョイント」というマリファナ入りの紙巻たばこを吸う。次に遺産相続がしたくなって、そのために仲間の一人が死ななくてはならなくなる。これは日本の昨今の保険金殺人を思わせおもしろい。さらに酔っ払った勢いで車を暴走させたり、不倫中に相手の亭主に出くわしてしまう。また、脱税を思いついたり、路上で警察に止められ取り調べを受けたりもする。最終節では、ドイツの軍隊である連邦国防軍に入るが、その生活は酒びたり。レストランでステーキを食べると、その肉が狂牛病だったりする。最後に亡命庇護を求めているが、これはドイツの難民問題をほのめかすものだろう。

繰り返すが、飲んだくれの「イエーガーマイスター」が次々とばかげた事件を起こす。しかし、よくよく考えてみると、その飲んだくれというのは私たち正常な人間と対置されるものではなく、さまざまなストレスに押しつぶされそうになり、思わず酒に手を出さずにはいられなくなる私たち現代人そのものを示すものではないか。また、ばかげた事件とはいうものの、それら一つ一つが今日ドイツ人が日常で体験することであり、さらにそれは演繹的に見れば、単にドイツのみならず、先進諸国の人々がとかくしでかしてしまう事件ということができるとはならないだろうか。なぜそんなことになってしまうのか。これについてトーテン・ホーゼンは歌の繰り返しの部分、つまり「1人の存在はみんなのため、

みんなの存在は1人のため・・・」と歌われる部分で解答を与えようとしているのではないだろうか。「1人の存在はみんなのため」のドイツ語は>Einer für alle<であるが、これは先に述べたお酒「イエーガーマイスター」の宣伝文句である。宣伝では、イエーガーマイスターの「一瓶はみなさん全てのものです」という意味合いで用いられているのであるが、これをトーテン・ホーゼンは巧みに利用し、その文句の後に「1人」と「みんな」を入れ替えて繰り返している。そうすると意味はがらりと変わってしまう。「1人」とは私たち個々の現代人であり、「みんな」とはその現代人が構成している社会全体を示すものとなる。先進諸国が進歩という名のもとに作り上げた現代の社会は行き着くところまで行ってしまい、画一的で弾力性のないものとなってしまった。それは私たち個人がもはや変えようにも変えようがないものなのだ。一方、私たち一人一人はそうした社会の確固たる枠組みの中で、あたかも全体に奉仕すべき単なる一要素のような存在になってしまうのである。だから、トーテン・ホーゼンは続けてこう歌うのだ。

誰もがいつかは去らねばならない
 その時君の心が張り裂けたとしても
 それでこの世が没落することなどありゃしない
 ほらほら怒りなさんなよ

私たちの一人が死んだとしても、この世は何事もなかったかのように動いていく。そして、「誰にもいつかは番が回ってくる」のであり、また「人生なんてそんなもの」なのである。個人の生命など風に舞う塵埃のようなものであり、それが置かれている社会なるものはいわば巨大な怪物である。そう思い知ると人間は耐え難い思いに駆られ、たまには「ばかげた」ことでもしてかしたくなるのである。さらに、初めに「クリスマスのパーティー」で集まった10人が次々に消えていくが、それにこりずに「イースターのパーティー」にはまたまた別の10人が集まっている。この10人も再び同じことを繰り返していくであろうことが暗示されて歌は終わっている。トーテン・ホーゼンはしかし、そうした人間の営みを決して否定的に歌っているのではないと思う。考えてみればなんともはかなく、無意味な人間の生活であるが、それに腹を立てても、それを否定しても始まらない。限りなく愚行を続けるだけの人間であっても、何か意味のあることもできるのではないかと歌の背後で盛んに訴えかけているように思えるのは気のせいだろうか。「ほらほら怒りなさんなよ」と訳した部分のドイツ語は>Mensch, ärgere dich nicht<であり、これは余談になるが、ドイツにはこの題名のゲームがある。テーブル・ゲームで他人の駒を蹴散らし、

自分の駒をゴールに導くもので、古くからドイツ人に愛好されているらしい。他人の駒をはじき出すとき、「ごめんね、怒らないでね」という感じで、この言葉を発するところから、このゲームの名前になっているのである。これをドイツ人と共にやっていて感じたことだが、もうすぐゴールという自分の駒がはねられる時のくやしさがこのゲームの面白さの一つなのだが、同時にゴールにあと一步と迫っている他人の駒をはねるのがもう一つの面白さになっている。しかし、その時彼らドイツ人は「ざまを見ろ」とまではいかにしないにしても、あくまでもゲームの中のこととして楽しくはねてのけるのに対して、私たち日本人はその時何とも申し訳けない気持ちになってしまうことと、ゲームの終了までにかかる時間が許容範囲を超えているように思えるのは、日本人とドイツ人の国民性の違いと言えるかもしれない。それはともかくとして、トーテン・ホーゼンはこの「ほらほら怒りなさんなよ」を歌の中に用いることによって、愚かな営みを繰り返すだけのように見える人間を、自分自身をも含めて一步距離をおいて眺めさせようとしているように思えるのである。

ところで、前章で取り上げたダンツァーの『10人のフィクサー』という曲は[Zehn kleine Negerlein]の原曲とは全く違うメロディーである。それに対して、トーテン・ホーゼンのこの曲は原曲のメロディーを使っている。ただし、「1人の存在はみんなのため、みんなの存在は1人のため・・・」に始まる繰り返しの部分（行頭を下げた部分）は、彼ら自身の作曲になっている。ここに、彼らの曲作りの巧みさがあるといえる。つまり、「イエーガーマイスター」が繰り返す「ばかげた」事件の部分にだけ原曲のメロディーを用い、それに対する彼ら自身のコメントの部分は別の旋律を付けることにより一種のアンチテーゼとしているのである。また、先に「降順の数え歌」には短調がふさわしいと言ったが、ドイツに流布している[Zehn kleine Negerlein]の曲は、実は短調ではなく長調であることを、ここに付け加えておかねばならない。言い訳がましくなってしまうかもしれないが、もしこれが短調であるなら、歌全体はあまりに暗く、子供の歌にはそぐわないものになってしまっていただろう。それはすでに述べたようにダンツァーの付けた曲が短調であり、その内容とも相まって、これ以上ないほど暗い曲調になっていることでも理解できるだろう。トーテン・ホーゼンはこれに対して、全体として暗い内容を長調のメロディーに乗せることにより、それでも残っているであろう希望の光をかりうじて表現することに成功しているのである。しかし、いずれにしてもこの両者の作品が訴えようとしているテーマは共通したものがあろう。それは麻薬にしてもアルコールにしても、それに犯され依存するようになった者の悲惨な実態を描くことにより、青少年に対してそうした状況に陥るこ

との危険性を警告すると同時に、健全に誠実に生きていくべきであるという一種の激励なのである。

5. おわりに

今回は [Zehn kleine Negerlein] というドイツの童謡をテーマとし、第3、4章においては特にドイツ・ポップスの世界におけるその展開をたどってきたつもりである。しかし、それはこの小さな童謡がドイツ・ポップスという限られたジャンルにしか生きながらえる道がなかったということを言いたかったからなのではなく、むしろその逆である。この歌は今もまだ、もともとの形で子供たちによって、あるいは幼稚園で、あるいは小学校や家庭でも歌われているであろう。また、むしろポップスの世界だけのものでもない。ダンツァーやトーテン・ホーゼンの歌は、[Zehn kleine Negerlein] の変形というか替え歌ということが出来るが、この点で言うなら、この歌はそれ以外にもさまざまな形でドイツ社会に定着しているということができる。すでに何度も述べたように、一人また一人と減っていくこの歌の構造は、とにかく社会批判的な歌詞には打ってつけなのである。例えば、作者不詳でいつできたのかもわからないものだが、『東ドイツの10人の黒ん坊 (Zehn kleine Negerlein in der DDR)』¹⁸⁾ というのがある。歌の大まかにはこんなふうである。例によって一人ずつ消えていくのだが、ヴァルター・ウルブリヒト (Walter Ulbricht) は東ドイツ最初の国家評議会議長であったが、酒の席でこのウルブリヒトの真似をした者がまず最初。以下、ピアノで西のミュージカルのメロディーを弾いた者、党批判をしてシュタージといわれる国家公安局 (当時の秘密警察) に捕まる者、ラジオを聞いていて西ベルリンのリアス放送局に周波数を合わせた者などが次々と消えていく。これはまだ当然ドイツが東西に分裂していた時代の東側を歌ったもので、おそらくは西の人が東を揶揄して作ったのではないかと思われる。旧東独のSED (社会主義統一党) 一党支配の時代には、冗談ではなくそんなこともあったのである。

また、建築現場に働く者の厳しい労働条件を替え歌にした『10人の土木作業員 (Zehn kleine Bauarbeiter)』¹⁹⁾ などというのものもある。言葉で説明しようとする回りくどくなるので、これは以下に歌詞を載せてみる。そうすれば意味は一目瞭然だと思う。

Zehn kleine Bauarbeiter	十人の土木作業員
Zehn kleine Bauarbeiter fällten ein paar Bäum', einer hat nicht aufgepaßt, da schafften nur noch neun.	十人の土木作業員、木を何本か切り倒した、 一人が注意を怠って、あとはもう九人。
Neun kleine Bauarbeiter schafften durch die Nacht, einer der ist eingepennt, da schafften nur noch acht.	九人の土木作業員、夜通し働いた、 一人が眠り込み、あとはもう八人。
Acht kleine Bauarbeiter bekamen ihre Schecks ausgeschrieben, einer der ging sich beschwer'n, jetzt schaffen nur noch sieben.	八人の土木作業員、もらった小切手偽物で、 一人が苦情を訴えに行き、今はもう七人。
Sieben kleine Bauarbeiter schafften mit der Flex, einem ist sie ausgebüxt, jetzt schaffen nur noch sechs.	七人の土木作業員、靴下どめを伸ばして遊んだ、 一人のゴムが伸びきって、今はもう六人。
Sechs kleine Bauarbeiter wuschen ihre Strümpf, einer hat daran gerochen, jetzt schaffen nur noch fünf.	六人の土木作業員、長靴下を洗った、 一人が臭いを嗅いでみて、今はもう五人。
Fünf kleine Bauarbeiter tranken etwas Bier, einer traf die Polizei, jetzt schaffen nur noch vier.	五人の土木作業員、少しビールを飲んでいて、 警察に出くわし、今はもう四人。
Vier kleine Bauarbeiter aßen einen Brei, einer hat zu viel gegessen, da schafften nur noch drei.	四人の土木作業員、お粥を食べた、 一人が食べすぎ、あとはもう三人。
Drei kleine Bauarbeiter schweißten rum mit Blei, einem fiel es auf den Fuß, da schafften nur noch zwei.	三人の土木作業員、鉛で溶接をしていた、 一人の足にとろりと落ちて、あとはもう二人。
Zwei kleine Bauarbeiter brauchten einen Schreiner, einer wurde umgeschult, da war es nur noch einer.	二人の土木作業員、建具屋さんが必要になり、 一人が転職させられて、あとはもう一人。
Ein kleiner Bauarbeiter wollt nicht allein schaffteen, da wechselte er die Firma, da warn sie wieder zehn.	一人の土木作業員、ひとりじゃ仕事したがらず、 会社を替えたら、また十人になっちゃった。

この歌も今まで挙げた詞と大差はないと言えないこともない。彼らは労働の現場でいろいろなストレスにさらされている。それなりに一生懸命働いているのだが、なぜかうまくいかない。危険な労働や徹夜の作業、古くなった作業服も取り替えられず、時に大怪我もする。ストレスはたまり、食べすぎたり、飲みすぎたりもする。結局、従業員はどんどん減っていくことになる。さらに「会社を替えたら」以前とは違うものの、また同数の人間が集まって、どうやらまた似たようなことを繰り返しそうである。リストラ社会といわれる現在の状況をこの歌の特性にうまくはめ込んだ秀作といえるだろう。この他にも学生や労働者のストライキの歌としての替え歌などもあるが、これらの多くは職場や勉学の条件

や環境の改善、経済的条件の見直しなどを訴えるもので、上の「土木作業員」の歌とほぼ同様の内容のものである。それゆえ本論ではこれ以上別の例を見ることはしない。最後に [Zehn kleine Negerlein] の歌は極めて単純な構造をもつ小さな童謡であるが、この歌の生命力の強さはその単純さ、及び一人また一人減っていく「降順」の数え歌だということにあること、そして、この歌は今日なおさまざまな場面で使われ、または歌われていることを繰り返して本論を終えたいと思う。

[了]

註)

- 1) Zehn kleine Negerlein, aus "Mein Gespräch, meine Lieder - Liedermacher im Deutschunterricht", 1986, Langenscheidt KG, Berlin und München, S. 66.
- 2) 訳詩の最後に訳者名のないものは、本論の筆者による翻訳である。
- 3) Zehn kleine Negerlein aus Hessen, aus dem Internet "<http://ingeb.org/Lieder/zehnklei.mid>"
- 4) 平野敬一『マザー・グースの唄ーイギリスの伝承童謡』、中公新書 275、中央公論社、昭和 47 年 1 月 25 日初版。
- 5) 同上、121～124 頁。
- 6) 同上、124 頁。
- 7) 同上、120～125 頁。
- 8) 以下のインターネットからの情報であるが、本人は学術的なものでなく、あくまでもプライベートなものだからという理由で、その氏名を伏せている。
Nursery Rhymes Garage <http://www2.tky.3web.ne.jp/~renn/nr/index.html>
- 9) この詩の訳出にあたっては、本学国際学部と同僚でアメリカ文学を専門にする森有礼氏の助言をいただいた。また、同氏からは、原文の [Injun] はアメリカ南部の方言であり、この歌の背景には、南部における黒人差別の問題が重ねられているのかもしれないというご教示をいただいた。
- 10) H.R.F. キーティング他著『新版アガサ・クリスティー読本』（秋津知子他訳）、早川書房、1990 年、123 頁、302 頁、362 頁参照。
- 11) Text & Musik: Klaus W. Hoffmann aus der MC "Das Bärenorchester", Patmos Verlag, Düsseldorf, MC 1800/4
- 12) Text & Musik: Georg Danzer aus der LP "Feine Leute", 1979, polydor 237 1926
- 13) 講談社英和中辞典。1994年11月28日、川本茂雄他編
- 14) Meyers Taschenlexikon in einem Band, hrsg. u. bearb. von Meyers Lexikonredaktion, B.I.-Taschenbuchverl., 1992, S. 257 "Ghetto".
- 15) この段、麻薬関連については以下を参照。

- Harenberg Schlüsseldaten 20. Jahrhundert - Das Lexikon über unser Jahrhundert, Harenberg Lexikon Verlag in der Harenberg Kommunikation, Dortmund 1993, Vierte verbesserte Auflage 1995, Herausgeber: Bodo Harenberg, Redaktion: Tilman Betz usw., S. 619, 673 und 749.
- 16) Die Toten Hosen: Zehn kleine Jägermeister: im Album > Opium fürs Volk<, 1996, JKP 03.
 - 17) 拙著『死んだズボン? <ドイツ・パンクグループ「トーテン・ホーゼン」の歌と活動について>』宇都宮大学国際学部研究論集 第3号 1997年3月、229-249頁。
 - 18) Zehn kleine Negerlein in der DDR, aus dem Internet "<http://web.marschall.net/fish/storays/german/miscstor/42.HTM>"
 - 19) Zehn kleine Bauarbeiter, © by Martin Burggraf
Martin Burggraf, Ringstraße 6a, 56242 Marienrachdorf, martinburggraf@t-online.de

Resümee der Abhandlung

»Ten Little Indians …Über ein deutsches Kinderlied “Zehn kleine Negerlein”«

Diese Abhandlung ist über das in Deutschland viel und gern gesungene Kinderlied “Zehn kleine Negerlein”, das fast kein Deutscher nicht kennt. Dieses Lied hat aber je nach der Gegend Deutschlands verschiedene Texte. Am Anfang des Liedes gibt es in jeder Version 10 kleine Negerlein, und strophenweise geht einer nach dem andern irgendwohin weg oder stirbt. Aber der größte Unterschied besteht darin, daß in der einen Version am Ende des Liedes die 10 Negerlein glücklicherweise alle wieder zurückkommen, während in der anderen die 10 alle sterben bzw. verschwinden und keiner mehr bleibt. Woher kommt der Unterschied ?

Man kann die Wurzel dieses Liedes in den >Nursery Rhymes< Englands finden, d.h. in der sogenannten >Mother Goose’s Melody<. Hier hat das Lied den Titel »Ten little nigger boys« oder »Ten little Injuns«, aber jedenfalls gibt es denselben Unterschied, den ich oben genannt habe. Er ist wahrscheinlich im Prozeß der Verbreitung dieses Liedes in England und Amerika entstanden, und auch in Deutschland so ohne weiteres übernommen worden. Es ist also denkbar, daß auf diese Weise auch in Deutschland verschiedene Textversionen und Parodien entstanden sind.

Auch in der Szene der deutschen Popmusik kann man einige Parodien auf dieses Lied finden. Hier möchte ich zwei Beispiele erwähnen. Das eine ist »Zehn kleine Fixer« (1979) von Georg Danzer. Danzer stammt eigentlich aus Österreich, aber er ist auch in Deutschland als ein individueller Liedermacher ziemlich bekannt. Das Thema dieses Liedes ist das Verhängnis der Drogensüchtigen. U.a. wurde hier z.B. der bekannte Fall der >Drogen-Karriere< der 16-jährigen Christiane F. in West-Berlin zu einem Liedtext verarbeitet. Die Geschichte wurde 1978 von der Zeitschrift >stern< als eine Serie >Wir Kinder vom Bahnhof Zoo< veröffentlicht, und 1981 von Ulrich Edel verfilmt. Sie behandelt den Teufelskreis von Abhängigkeit, Kriminalität und Prostitution, und sucht die Möglichkeit, das Problem des Drogenmißbrauchs von Jugendlichen zu überwinden. Dementsprechend ist das Lied von Georg Danzer

als eine Auseinandersetzung mit diesem Problem geschrieben worden.

Das andere Beispiel ist »Zehn kleine Jägermeister« von der Punkgruppe »Die Toten Hosen«. Auch hier wird das Problem der Drogenszene behandelt. Aber nicht nur dieses Problem, sondern auch die vielen schrecklichen Ereignisse, die die Deutschen heutzutage im Alltag erleben, z.B. das grausame bzw. gemeine Verhalten derer, die viel zu schnell Auto fahren, die ihre Steuer heimlich sparen wollen, das besoffene Leben in der Bundeswehr, das Problem des Rinderwahnsinnes u.s.w. Und darüber hinaus besingt diese Gruppe in diesem Lied schließlich auch den unveränderlich strikten Rahmen unserer Gesellschaft und die Vergänglichkeit des menschlichen Lebens.

Die Struktur der beiden Lieder lehnt sich eng in das Schema des Abzählreimes an, wo einer nach dem andern "rausfliegt". Diese Art von Liedaufbau beschreibt sehr eindringlich das Schicksal des Drogen- und Alkoholabhängigen. Am Ende dieser Leute wartet nämlich meistens der Tod. Beide Lieder wollen die Jugendlichen dazu aufrufen, den Drogen und dem Alkohol fern zu bleiben und ein ehrliches und wüdevolles Leben zu führen.

Am Ende bin ich zu folgendem Schluß gekommen: Die Struktur des Liedes »Zehn kleine Negerlein«, in der einer nach dem andern verschwunden und nicht wiedergekehrt ist, paßt genau zu diesen beiden Liedern. In beiden Liedern ist das Thema stark sozialkritisch, und gleichzeitig ist es eine Art Anfeuerung und Ermutigung für die Jugendlichen, ehrlich und würdevoll weiterzuleben.

(1998年11月2日受理)